

## 創立20年の節目に寄せて

西本晃二（会長）

ちょっと手前味噌になるかも知れぬが、2006年W杯の結果は、日本のサッカーにとっても、そればかりかもっと大きくいえば、世界のサッカーの在り方に関して、我々「むさしのFC」が取って来た「行き方」が間違っただけでなかったことを証明してくれたように思う。

日本についていえば、その惨敗に関してジーコ監督の作戦の誤りをいろいろ上げつらう声が聞かれる。たとえば「第1試合の対オーストラリア戦の後半に、小野を投入したのは間違いだった」といった類いである。だが、あれは前半に中村俊輔が右から上げたクロス（したがってシュートでもなんでもない）を取りに行ったオーストラリアのゴールキーパーに、（故意ではなかったのだが）高原が接触して、そのままゴールに入ったことと関係がある。あの本来ならファールで無効のはずの、拾った得点をなんとか守り切ろうとして、しかも日本に勝るオーストラリア選手の技術と体力を考慮して、後半になんとかもう1点を早めに取り、安全圏に入り、後は守りについても小野の経験を生かして守備を締めようとい

う、攻めと守りの考慮が働いていたと思う。その意図は一種の「賭け」であって、やってみなければ誰にも判らない。旨く行っていたら、ジーコの采配は素晴らしかったとベタ褒めになったはずである。そういうことであるのに、負けの責任を（外国人の？）監督に押し付けて、本当の原因である日本選手の技術と体力（そのいずれについても、ブラジルはいうに及ばず、クロアチアにもオーストラリアにも、日本ははるかに劣っていた）を隠そうとするのは間違いで、もっと現実を直視しなければならない。あの代表選手達では、どんな監督が来て、どういう戦術で試合に臨んでも、手の施しようがなかったらと思う。

だいたいサッカーは、世界のスポーツのうちでも、いちばんルールの数が少ないゲームの一つで、僕は自分が（弱い）東大サッカー部の部長をしていた時、野球部の監督から「いったいサッカーの監督って、何をやるんですか？」と聞かれたことがあるくらいだ。しょっちゅうタイムを取り、サインを出し、ホームランが打てても、バントの指令があればバントしなければならない「管理スポーツ」の野球に慣れた、しかも（サッカーをよく知らない）日本のスポーツ・ジャーナリストや解説者は、サッカー

ーについても一々監督がプレーヤーに指示を出すとも思っているのだろうか。オーストラリア戦で1点、<sup>もう</sup>儲け物の先取点が転がり込んだ時、「W杯では、先取点を取ったチームが負けたためしはありませんよ」などというバカげたコメントを、元日本代表の監督ともある岡田が得々とするくらいだ。他は<sup>お</sup>推して知るべしである。

いったん試合が始まったら90分間、あるいはハーフタイムまでの45分間は選手が自分で考えて、仲間のプレーヤー達と以心伝心で試合をどう運ぶか、それも刻々と変化する試合の流れに応じて決めていくのがサッカーで、一々指図してもらわなければ何をしたら好いか判らないようではサッカーは出来ない。箸の上げ下げにまでも注文をつけるトルシエ監督にスッカリ嫌気が差して、今度はジーコに来て貰ったら、何も言ってくれないので途方に暮れる日本代表では、話にならない。「自分で考えながらプレーする」というのはサッカーの基本である。「考える能力」を何とかして身に付けて貰おうと思って、我々の「むさしのFC」を作ろうという話になったのである。

いま日本選手の技術と体力が、他国の選手に比べて劣っていると書いたが、これはその通りなので、たとえば中田英寿選手にしても、まだ中田がペルージャにいて僕もイタリアに住んでいた時に、イタリア人や日本人でサッカー好きの友人とテレビでペルージャの試合を観ていて、「中田はなるほど好い選手だけど、あの程度のプレーヤー、あるいはそれ以上の者は、他にもイ

タリアにはいっぱいいるよね」という結論になった。その時に僕が理由として上げたのは、中田は自分でボールをキープしながら敵を抜いて、自力でシュートしない、あるいは出来ないという点であった。外国のプレーヤーは自己主張が強いというか、先ず自分が得点しようとする。ボールが自分のところに来ると、チェックに来る相手チームの選手と体をぶつけ合い、競り合っこれ抜き、なんとしてでも突っこんで行って、自分がボールをゴールに蹴り込もうとする。これが先ず基本で、しかし諸般の状況でそれがどうしても無理だとなった時に、初めて球を仲間の選手に渡すのである。それがマラドーナみたいな点取り屋だけでなく、ミッドフィールダーでもバックでも、皆がそう思ってプレーしている。ところが中田には、儒教的というか「奥床しい」というか、それとも自信がないと見るか、それは人によるが、余りボールに対する執念がない。そういう球離れが好くて、しかも相応に全体を見渡せる目を持っている選手が、適当にボールを配給してくれるから、特にイタリアのように「がむしゃら」に自己を主張しようとする傾向の強いチームの中では評判が良かった。ところがボルトンのように、英国流で肉弾戦を好み、各人自分一人でなんとかやれ、というようなサッカーだと、中田はもたない。日本チームの中では抜群の中田でさえそうなのだから、執念も技術も体力もずっと劣った、他の日本選手が相手チームのゴールエリアの中でシュートが打てるわけがない。今回の日本

チームのシュートが、いずれもゴールから遠く離れた地点から打たれたもので、狙いすましてゴールに叩き込んだというようなものでは全然なかったというところにも、それが表れている。

ゴール・キーパーの川口にしてもそうだ。クオアチア戦でPKをセーブしたので、大いに褒められているようだが、じつは第1戦の同点ゴールは、前に出なくても好いの<sup>はや</sup>に逸って飛び出して、カラになったゴールにボールを蹴込まれたので、自分より後ろには誰もいないのだから、ゴールを絶対に空けてはいけないという、キーパーの鉄則<sup>あろそ</sup>を疎かにした結果だ。第2戦でも観ていたら、味方のバック・パスに油断して、次に何処に出そうかとキョロキョロしてボールを見ておらず、イレギュラー・バンドした球は川口の手をすり抜けてゴール・ラインを割り、コーナー・キックになった場面があった。あれなぞも、もしもセット・プレーから点を取られるようなことになっていたら、またはイレギュラーの方向がゴールの方向に行っていたらそれこそ自殺点で、試合は負け。日本は全敗で最下位（どうせ最下位ではあるのだが）の体たらくになる<sup>てい</sup>ところだった。90分間いつでもコチコチ、気を張り詰め通しては、それこそ疲れてしまって身がもたない。が、あの場合などはキチンとボールを取ってから、次の処理を考えれば好いところで、いちばん基本的な動作と、集中力の緩急に欠けるところがあつたわけでそれだけでも落第である。

では今の日本代表選手達　これを「黄

金世代」と持ち上げたジャーナリズムの気が知れない！　はもう仕方がないとして、これから日本サッカーの球に対する執念、体力、技術・集中力など、あらゆる面をレベル・アップするにはどうすれば好いかとなると、極端ないい方かも知れぬが、スエーデン人かナイジェリア人との結婚でも推進して、人種改造をやらねば追いつかないということになるかも知れない。「無茶苦茶だ」と言われるかも知れぬが、じつは日本代表チームはとっくに、何が「生粋<sup>きっすい</sup>」か判らないが、「生粋」の日本人だけではどうにもならないと承知していて、前にはラモスやセルジオ越後、今でもサントスや監督にもジーコ、あるいは今度のオムシを入れて人種改造をやっている。これをもっと徹底すれば、そして「生粋の」という得体の知れない差別を取り払って、もっと我々自身が日本の市民権を持っている人間は日本人と認める、オープンな考えになれば好いだけの話で、さもなければ相撲同様、上位はすべて外国籍力士が占める日が来るのもそう遠くはあるまい。だいたいボールに国境は無いのだから、外国人だ日本人だというような区別をする時代ではなくなっていることを自覚しなければ日本は孤立してしまう。イタリアと優勝を争ったフランス・チームをみても、大半がいわゆるヨーロッパ人種のフランス人以外の選手からなっている。

話がフランスとイタリアに行ったから、ついでに優勝決定戦のジダンとマテラッツィの喧嘩の話についても一言。ジダンの頭

突きはいけないが、本当はあれはマテラツツィが悪い。僕は長い間イタリアに住んでいたから、イタリア人が無分別に何でもかでも言い散らす悪い癖を知っている。「アア、また出たな！」というのが、今回の事件を聞いた途端に頭に浮かんだ感想だった。ついで昨日だったか、これもイタリアに長く住んでいて、今も居住中の知人が一時帰国して来たのに会い、この件がイタリアでも問題になってのに話が及び、僕が「Figlio di puttana! (=淫売の倅)(よく使われる軽蔑の文句)とでも言ったの？」と訊いたら、「そうじゃない、もっと悪い！」という返答だった。あれは試合中にマテラツツィが何度も、止めようとしても止められないジダンのユニフォームを掴んで散々邪魔をしたので、ジダンがシビレを切らして、「そんなに俺のユニフォームが欲しいなら、試合が終わったらやるよ、待ってる」と言ったのに対して、マテラツツィが「そんな物は要らん。お前の姉貴を寄越せ」、つまり「淫売の娘も淫売」とやり返したのが原因といわれている。イタリアのテレビがインタビューでマテラツツィに「母親のこと(= Figlio di puttana!)を言ったのか？」と問いただしたのに対して、「母親に関しては、何も言うてはいない」と言いながら、ジダンの姉については何を言ったかを明かさないので、そういうことだろうと、もっぱら推測されているとのことだ。恐らくそうだろうと思う。世の中には言うて好いことと悪いことがあって、マテラツツィはそれを越えた。そうでなければ、血の気の方

いジダンだが、ああまで怒ることはないだろう。ジダンだってイタリアで長い間プレーをしていて、似たようなことは言われつけているだろうに大人気ないという意見もあるが、イタリア語が判って相手に罵りの意味が十分通じるだろうと知っているからこそ言う方が、もっと悪質だ。

日韓ワールドカップの時にカメルーン代表で来日し、現在バルセロナで活躍しているエトーという好いフォワードがいるが、これがミラーノで試合した時に、イタリアの応援団が「猿だ！猿だ！」と、余りにひどい野次を飛ばすのに怒り、「もうこんなスタジアムではプレー出来ない！」と試合を放棄しようとして、審判が「マア、マアそう言わないで」となだめる一幕があったと新聞報道されたのを読んだことがあるが、イタリア人はそういうことをやりかねないのである。ただしイタリアだけを責めて、自分は好いと考えていると大間違いで、むかしロッテ球団の金田がまだピッチャーだった頃、神宮球場で金田の好いピッチングに抑えられている相手チームの応援団が、聞くに堪えないような差別発言を、聞こえよがしに怒鳴るので、いたたまれない気になったことを思い出す。

こう見てくると、野球やサッカーのような大衆スポーツでは、選手ばかりでなく観客のうちにも、英国のフーリガンの振舞いにも現れているように、競技そのものには余り関心がなく、日頃たまっている鬱憤を晴らすためならば、何でもやらかそうという部分があることが判る。自分には自分の

行動基準があって、状況の如何に拘わらず、それを逸脱するような振舞いはしない。そういうプレーヤー、また観客になりたいものである。この間も、たまたま週刊文春(7月6日号)のページをめくっていたら、「W杯の心境」という題の4コマ漫画が目についた。山形で幼児殺害事件があったのに引っ掛けてだが、TVでW杯のゲームを観戦している亭主に向かって、ハルコという主婦が、「まだW杯見てんの?」「もう日本はいないのに、むなしくない?」「これって、たとえば、自分の子供はもういないのに、よその子供が元気にはしりまわるのをみているような・・・」「なんだか、あの容疑者のキモチが・・・しみじみ」という、ゾッとしない漫画である。むろん自分の国である日本を応援する気持ちはごく自然だが、それとサッカーというスポーツを面白いと思う気持ちとがゴッチャになっているというか、むしろサッカーの方は二の次なのだ。こういう人は、わがクラブには少ないと思うが、世間には結構いるものだ。そしてナショナリズム的な部分が嵩ざると、勝ち負けだけが大事になって、結果次第で先程の被差別的な野次になる。本当のサッカー好きではないのだ。

もう一つ、今度の大会で出てきた問題に商業主義がある。ジーコが不満を洩らしていたように、クロアチアと日本のゲームを現地でいちばん暑い時間帯に設定したのは、日本のTV会社がそう仕向けたのだらう。それは日本の観客が見易い時間を考えてということになっている。じじつゲームのい

ちばんやり易い、涼しくなった夕方のキック・オフにすると、決勝や準決勝のような大事な試合の場合のように、実況で観るには日本時間で午前3時45分からになる。視聴者の都合と称して、じつはテレビが自分のプログラムの視聴率を上げるために無理を言って、結果的にはゲームの内容が落ちた。あの時中田(英)選手が言っていた、「暑さは両チームにとって平等で、だから日本だけが損をしたわけではない」というのはその通りだが、サッカーの質からいうと、悪いコンディションの時にやってプラスになるわけがない。サッカー以外の考慮の方が優先しているのだ。このことは、すでに1994年アメリカでの大会の時に先例があって、ヨーロッパの視聴者の都合を考えて時間をズラし、炎天下の試合になって批判が出た。ナショナリズムとか商業主義とかがはびこって、全てがイベント化してしまったわけだ。

むろんサッカーがより多くの人々の関心を集め、人気が出るようになるのは望ましいことで、イベントも役に立たないわけではない。が、それにも限度がある。この文章の始めにも書いたが、日本が強くなることだけが目的なら、人種改良でもやらなければ追いつかないだろう。けれどもサッカーというスポーツの面白さに開眼して、ただ試合に勝つという成果主義やナショナリズム、あるいは「儲け主義」の安易な宣伝に振り廻されず、そうではなくて、各人が独自の視点を持って「自分のサッカーをし・また観る」、そういう人達の拠点になれ

ば好い、またそれが本当の意味で我々のサッカーを好くすることにつながると考えて、「むさしのFC」が出来、20年続いたわけである。今後もその初心を忘れず、クラブの火を消さないように希って止まない。

---

## サッカーの面白さって？

長谷部智明（ウインズシニア）

文才がない私がこのような会報に文を載せるのは恥ずかしいのですが断りきれず何か書いてみようかという事になりました。私の仕事をご存知の方もおられるかと思いますが自動車の販売を営んでいます。先日鹿島アントラーズに勤めている後輩から連絡がありジーコが使っていた（正しくはジーコの奥さんの愛車）車を高価で買い取って欲しいと依頼がありあの中学生の頃に憧れていたジーコの持ち物なので二つ返事でジーコの言い値で買い取る事にしました。（実際は車検証上でこれは儲かると思ったのですが）しかし車が着たらびっくり思い描いていた車とは違い安いタイプの車種でした。まァー儲けがなくなっただけで損はしないとは思いますが・・・

皆さん興味があるのはどんな車に乗っていたんだろう？と思うのではないかとということで車種だけお教えいたしましょう。BMW X3 という車です。これはジープ型の車です。

昨年購入したばかりで700KMしか使用していませんでした。ともあれ興味がある

方（もちろん購入希望）ご連絡下さい。

さて折角サッカークラブの会報でもありワールドカップイヤーでもあったのでサッカーの話少々しましょうか。

私が生放送で始めてワールドカップを観たのは1979年のアルゼンチン大会からです。私は1962年生まれですから16歳高校一年生の時です。その頃はサッカー雑誌はサッカーマガジン、イレブン、ダイジェスト（出てたかな？）ぐらい。TV番組は週間で放映されていたのは三菱ダイヤモンドサッカー、元旦に天皇杯、（日本リーグはあまりTV観た記憶がない）ぐらいで何しろサッカーの情報が少ない。サッカーのTV放映は欠かさず見ていました。（まだビデオも世に出回っていなかったから）それでもサッカーを観たいという欲求に溢れ週末にはよく日本リーグを観に西が丘、国立に行ったものでした。

競技場で観るサッカーは全体の動きが観れ、数少ない外人選手のプレーを記憶にとどめようと目を皿のようにし観に行っていました。しかしTVで観る外国のサッカーで一番びっくりしたのは観客の多さです。どのゲームも（もちろん観客が入るゲームを放映していると思うのだが）満席、熱狂！アルゼンチン大会ではあの紙ふぶき。あの場所に行きたい。

海外では毎日サッカーの情報に溢れ色々な人とサッカーの話が出来、町では至る所でボールを蹴れ好きな時にサッカーが出来る。（私の通っていた学校では週4回しかグラウンドを使用できなかった）

日本でもそういう日が来るのか？  
現在Jリーグでも観客がいっぱいになり応援も海外に誇れるようになりTVも（ケーブルTV）毎日放映、雑誌も数知れず。

あー あの時に戻りたい。なんでだろう？  
今ではビデオもあり好きな時にサッカーが観放題。雑誌も読みきれないほどあり、サッカーもむさしでは好き放題出来る。

あんなにサッカーに飢えていてやっと好きなサッカーにたくさん触れられるようになったのにつまらない。なんでだろう？

今年はドイツでワールドカップがありTVで全試合放映がありました。昔だったら全試合観てたろうし情報誌もたくさん買っていただろう。

TVで何試合観たかな？日本戦はすべて観たから5試合ぐらいか？

79年、82年ぐらいまでかな？各国の特徴が出たサッカーをやっていたのは。  
高校、大学の頃はイングランドって叫んでセンターリングする奴がいたりマラドーナって言って左足でドリブル。ストッキング下ろしてケンペス。ゴールの後も選手の喜び方の真似。

82年準決勝フランスVS西ドイツのPK戦。トレゾールがPKを蹴らない。黒人は一人も蹴らない。でもフランスは勝つために黒人を代表にしたのでは？

イングランドも今では黒人が出ている。人種差別をする訳ではないが純国産の人間でチームを作らなくなった今どのチームも同じサッカー。勝つために人より早く走り、あたりを強くし、多く走る。相手によって

ゲームプランを変えることもなければ頭を使って相手の弱点を付くような事もしない。自身のチームの良さを出そうともしないし、何をすれば良いかと考えているのか？

81年かな？イタリアでおこなわれたフラメンゴVSユベントスの試合をダイヤモンドサッカーで放映。ジーコは出ていない。プラティニは出てた。ユベントスはボニエク、カプリーニ、ジェンティーレ、プラティニなどビッグネームがたくさん。フラメンゴはジーコが出ていないのでレアンドロ、ジュニオールぐらいかな？このゲームは面白い。後半はちょっとつまらなくなったが。今ではビデオが擦り切れてよく観れない。誰かこのゲーム知っているかな？このゲームはフラメンゴがすごく良く、力的にはユベントスが上なのだけどユベントスの良さを殺しチャンスをたくさん作っていた。前半は点は入らなかったと記憶しているが何しろ何回も巻き戻して観た。また観たくなったので後で観よう。たぶん線が入ってよく観れないけど。こんなゲームなくなったよな～。

ワールドカップ面白かったですか？日本代表どうでした？サッカーの楽しみって何ですか？

---

## ドイツに行ってきました

清水 正人（若杉主務）

むさしのFCの皆様、若杉の主務の仕事を投げ打って、6月16日から26日にかけて

て、クロアチア戦、ブラジル戦の日本戦チケットがうまく手に入りましたので、ドイツにいつてきました。

ちなみに、私は、これで5回目のワールドカップでした。思えば、1986年メキシコに。そこで布施さんと会ったのが、むさしのFCとの出会いでした。当時、むさしのFCは、立ち上げ寸前、スクールを始めたばかりでした。波多野貞之君や平林さんと会い、そして、マラドーナとイングランドを観れて、決勝を観て、すさまじい虚脱感に襲われました。

それから、私のワールドカップへの旅は、その虚脱感探しをしていたのかもしれませんが。イタリア、フランス、日本、韓国。どれも、何試合みてもその虚脱感を得ることはできませんでした。

今回、やっと日本戦のチケットを得て、特に、対ブラジル戦において、もしかすると、その虚脱感を感じれるかもしれないと期待しながら。

過去4回の外国でのWCで、試合観戦前の会場やその道すがらの雰囲気、その国の観光は、いつも素晴らしいものだと感じていました。

でも、いつも、自分の国でない試合を見るという後ろめたさを持っていました。それが、今回なかった。その後ろめたさがない2試合でした。特に、ブラジル戦では、ケルンからドルトムントの車内で、むさしのFCの成瀬和弥さんに出会う偶然もあり、気分は、相当高揚していました。しかし、観戦の後での、「アホー」といいた

くなるような屈辱感、そして疲労感、予想通り過ぎる結果のばからしさに、虚脱感より、体の調子が悪くなりました。

中田さん、人生は旅だなんて、かっこいいこと言わないで。あなたはがんばった。しかし、あなたが最盛期を過ぎているのを感じたのは私だけではないと思います。それを、あなたは一番知っているはずです。

そして、日本に帰ってきて監督交代の騒ぎ。私は、サッカー界において、日本人の健忘症と無責任体制は、少し変化するのではと期待していましたが、本当に見事に裏切られました。

それでも、ドイツへの旅は、その2試合以外すばらしいものでした。思ったよりも食事が美味しく、ドイツ人は、思ったより融通がきき、ヨーロッパは一つだという雰囲気はどこでも感じられ、そして、いまだにある、東と西の違いとノスタルジー。内戦がやっとおさまり、今回初出場し、ドイツにきたアンゴラのサポーター達との出会い。ファンフェスタと呼ばれるパブリックビューイング（無料）での大画面で観るWCのすばらしさ。その後ののんびりとした食事。（ちなみに、ドイツは、今回のために特別法を作り、飲食店の閉店時間の延長を認めたそうだ）

田園風景は美しく、私の仕事からも、十分に勉強になったし、芸術や文化は、経済を凌駕すると感じる、各地の街並み、美術館、コンサート。

人生は楽しいもの。こうした、はっきりした考え方に裏打ち人たちにより運営、歓迎

された素敵な大会でした。  
だから、また、私が昔から行きたかった国、  
南アフリカにいきます。時と場所はまた、  
最高の舞台だと期待しながら。そして旅の  
孤独を感じるために。

---

## ドイツW杯期間中、私たち主婦 の井戸端会議でも

笹島喜代美（ステラ）

「昨日見た？」と、サッカーの話題になることが多く「あれはディフェンスが...」「あそこはシュートでしょ」と、数人寄ればそこはもはや人数だけの解説者が存在し、熱く語り合う。

でもそこは主婦、日本が負けた途端、サッカーの の字も誰も口にしなくなり、主婦のW杯は静かに幕を閉じることになりました。

10年位前の私はサッカーにあまり興味も無く、ましてや自分がサッカーをするとは・・・

今年19歳になった息子が 学校でサッカーを始めたのは小学校中学年のころで、試合は必ず見に行き、その度、私はゴールネットの裏から「からだで当たれ！」「ボールを捕られるな！」「やる気あんのかー！」と、それは それは まさに鬼の形相で叫び続け 彼にとっては浅草寺の門番、風雷神に匹敵する恐ろしさであったと思います。

いつもおどされていた彼は 私に「そん

なに言うのなら、お母さんがサッカーやってみれば良いじゃないか！」の一言に「やってやるわよ！」と、売り言葉に買い言葉、引くに引けなくなり、ステラのお世話になりました！

始めたサッカーは私の想像をはるかに超え、難しく、ボールを満足に止めることも出来ず、こんなに頭を使うスポーツだとも知らず、自己嫌悪に陥る日々が続いていた矢先、息子が初めてキッズの試合に参加させてもらう機会がありました。吉田さんはとても、楽しそうに子供たちと「どこやりたい？好きなポジションで良いよ！」と声をかけているのに驚きハーフタイムでの和やかな雰囲気は驚き極めつけが「失敗してそれを一番解っているのは本人ですから」の言葉は今迄私が触れてきた学校でのサッカーとの違いにショックを受けました。正に青天の霹靂！

「本当、そうだ...なんでそんな事に気がついてあげられなかったのだろう」とダブルパンチの自己嫌悪。

それからと言うもの、息子の試合ではまるで別人のように静かに応援できるようになりました。

サッカーを通し息子との関係や自分の考え方を立ち止まり振返る機会を与えてくれたFCに感謝しています。

世代、性別を越え、沢山のひとと出会えたことは、親子共々本当に幸福です。この場を借りて皆さんに感謝！！ありがとうございます。

---

## むさしのFCよ、20周年おめでとう

市村和哉（ウインズ）

20周年を迎えた「むさしの」にワタシが入会してから、あっという間に15年が経ちました。

いや、あっという間ってのは大袈裟か。

だって、15年という月日は、子供を青年に、青年を大人に、大人をジジイにするだけの十分な時間なわけだし。

でも、本当についこの間、むさしのに入ったって感覚があります。布施・元理事長が花の独身時代を鷲進中だった、嗚呼、あの頃。1991年。

15年前かあ。15年前なら、ドリブルする時なんて、蹴って走れば何人でも抜けたのに。今じゃ、一人も抜けやしない。っていうか、最近ドリブルしたっけなあ。

15年前かあ。15年前なら、逆サイドにフリーなヤツが居たら、ワンステップでバシって蹴って、「オレ、もしかしてクーマン？」って思わず自己陶醉することもしばしば。最近はバシって音がするようなキックも出来なくなった。っていうか、クーマンって最近、何してんだらう。

15年前かあ。15年前なら、午前中に試合して、昼過ぎに二試合目をして、夜にフットサルをしても動けたな。今じゃ、一日一試合したら、もう腰は痛えーし、モモはパンパンに張ってしまうし。っていうか、最近は土日に一試合するのだから、奥さんとの調整が大変だもんなあ。

そのくらい、15年という月日は、短いようで長い、って話。

その間にワールドカップは4回もあったわけだし。

1994年のアメリカ大会。どっ昼間の暑い時間帯での試合が多かったからか、つまらない試合が多かった。それでも強く覚えているのは、優勝したブラジルのエース・ロマーリオよりも、やはり、最後の最後にPKを外してしまい負けてしまった時のロベルト・バジジオのあの姿。PKを外して絵になるのはプラティニとバジジオくらいか。外すだけなら俺にも出来るのに。

1998年のフランス大会。日本にとっては初のW杯だったわけだが、日本の試合がどうだったのか、正直よく覚えていない。いや、ブルーザー・プロディーバりのジャンピング・ニーパッドでゴールを決めたゴン中山の勇姿は覚えています。プロディーが誰なのかは、ここでは説明致しません。話を戻すが、ちなみに、ジダンはその頃からヘディングがとても上手かった。もちろん、その頃はボールにしっかりヘディングしていましたけど。

2002年は言わずもがな日韓合同開催。数年前までは、テレビの中で外国人同士でやっていたのが普通だったW杯。それを生で見られる時代になったのだ。しかも、日本代表の試合を。で、もちろん行きました、埼玉スタジアム、日本対ベルギー戦。当然ながら外国人対日本人の試合だったわけですが、なぜか日本人特有の黒い髪の毛をした選手が少なかったのは気のせいだったのだろう

か。稲本と鈴木においては、ベルギー人よりも髪が黄色だった。

そして、2006年ドイツ大会。これについては、まだまだ記憶に新しいところ。細かい話は省きます。ただ、あのジダンのマテラッティへのヘディングはどうなんだろう。彼と同年のワタシだが、まさかタメ口でその理由を聞けるわけもなく。伝説は伝説のまま、解明されない方がいいのかも知れない。伝説と言え、伝説の七人抜きをした元スーパースター、ディエゴ・アルマンド・マラドーナ。他の元スーパースターがVIP席でスーツ姿で観戦しているのに、彼ったら観客席でユニフォーム着ながら完全にイッちゃってた。マラドーナこそ本当のスーパースターだと今回確信したのはワタシだけでしょうか。ちなみに、着ていたユニホームはルコックでした。

思わず長文になってしまいましたが、そのくらい15年というのは、短いようで長いって話。

さて、こんな時代背景の中、むさしのFCとワタシが歩んできた15年。思い出の一つや二つはあります。いや、いくらでも。ただし、かなりの内輪ネタ。

いくつかあるエピソードのうち、ひとつだけ紹介します。

思い出すのは、ホセ・マリオ・デラ・ブラジルさん？ っていう、一時期むさしのFCに所属していたブラジル人（自称音楽家）が作ってくれた「むさしのFC」の歌をみんなで歌ったこと。場所は夏合宿先の寂れた体育館。

「 × & % # \$ @ むーさーしーのー  
むーさーしーのー 」

っていう（ブラジル人だけに）サンバ風の歌。

いや、ルンバ調だったかな？ いや、マンボ調だったか？ ウウウウウーウッ！

いずれにせよ、歌い始めはとても軽快なのに、一番盛り上がるサビのところの「むーさーしーのー」で突然、リズムがどんよりと、ゆーっくりになる不思議な曲。

体育座りした僕らの前で、変にハシャいでいたブラジル人・マリオを覚えています。

でも、それっきり彼を見たことがない。噂によると、合宿で披露したその曲（仮称：むさしのサンバ）を何と、当時の布施理事長に100万円だか何だかで売ろうとしたらしい。何てヤツだ。10万円だって買うもんか。逆に10万円払うんなら歌ってやるよ、ぐらい。

いずれにせよ、カネの受け渡しはなかったようだが、その曲は事あることに歌わせてもらっているの、今更ああだこうだ言うつもりはありません。

ということで、祝むさしのFC20周年。祝オレ15周年。

これからも一緒に歳を取って行きましょう。

---

## ワールドカップ2006

吉田 隆（前理事長、ラッジョ）

全試合を観た。私の印象としては低調な大会だったということ。決勝での退場事件

がそれを象徴している気がする。

一流プレーヤーは何人かはいた。しかし超一流 = スパースターはいなかったということだ。特に攻撃については、面白いプレー、感心させられるプレーが乏しい。前評判の高かったプレーヤー達もほとんど見せ場がつかれなかったようだ。ただメッシだけはもっと見てみたかったし、今後を楽しみにしたいプレーヤーではあった。ガーナとコートジボワールは、審判の判定に恵まれず気の毒であったし、初出場ということも含め経験が浅いためか、強豪との対戦では自信に欠け、実力が十分に発揮できなかったようで残念である。

ゴールキーパーの美しいキャッチングを最後に見たのは何時のことだろうか？しばらくの間お目にかかっていない気がする。最近のキーパーグローブは大きく立派なつくりとなっているが、もしかするとそのせいでキーパーが、シュートをキャッチしづらくなっているのかもしれない。キーパーのスーパーキャッチも、ワールドカップでの楽しみの一つであったが、これも消えてなくなりつつあるようだ。

イタリアが前回優勝したのは 82 年で、その時も八百長事件での、スキャンダルがあったというのは何を物語るのだろうか。審判の見えない所でシャツを引っ張ったり、あるいはファールをしておいて自分がファールをされたように、審判をあざむくことを平気でやる、プレーヤーが多いということ、八百長と相通じるものがあるのかもしれない。イタリアの優勝で汚いプレーヤ

ーや、こすっからいプレーが万延まんえんしないことを祈りたい。ピルロやカンナバーロはそんなプレーをしないで、実力を発揮しているのに。

今回の開催地はアフリカが予定されている。国でいえば南アフリカという事になるが、ここでアフリカ勢の中から、初のチャンピオンが生まれるだろうか。私は難しいだろうと見ている。というのは、審判の笛がヨーロッパと南米の強豪チームに、有利なものである内は、他から優勝する国は出てこないと思われるのである。人種差別について神経をとがらせている、F I F A のお偉方えらがたには、まずこの問題を解決してもらいたい。

「昔は良かった」と口をついて出てくるのは、まぎれもなく年をとったというので、それは百も承知している。今のサッカーは昔に比べ、レベルが上がっているのは事実であろう。ただ、私がワールドカップに期待するのはクオリティの高さなのだ。他のプレーヤーがどんなに頑張っても、マネできないようなプレーをその成否にかかわらず、少しでも多く見たいのである。ここ最近のワールドカップでは、その点が物足りないのである。

#### 編集後記

20 周年おめでとうございます。大人の仲間入りです。地道に「根」を広げる活動を期待いたします。(成瀬修)